
魚たーぷるーぷ

赤羽岩淵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魚たーぷるーぶ

【コード】

N0055B

【作者名】

赤羽岩淵

【あらすじ】

たこ焼きパーティーに始まり魚釣りを経て塩焼

テレビにたこ焼きが写っていた、たこ焼きパーティーがむっちゃしてえ。そう思つて一昨日友達数名に声をかけたのだがみんなの都合がつかないので今日やる事になった。

けど二日もたつと一昨日は天まで登るほどにあつたたこ焼きへの情熱とゆうか執念も今じゃマツチ棒ほどになり、もうめんどくせーやめじややめつてなつてたこ焼きパーティーの中止を各々に電話したところ『お前が決めたんだろ、俺折角バイト休んだのにふざけんなよ』『えーっなんでえ、やろうよたこ焼きパーティー』『うそー俺タコとかもう買ったのに』などと言われたので『うっせえお前らが一昨日たこ焼きパーティーしないからいかんのじゃボケ、人間二日もすりや考え変わるんじゃ』と反論した、そしたら『はあ！？だからいきなり言われたから無理じゃん、ボケはお前じゃ』『死ぬ』『ハゲ死ぬ』と罵倒の嵐にあいむかついたので携帯電話を曲がったらいけない方向に折り曲げ破壊して今釣りに来ている。

しかし全く魚が釣れない、二時間はかるくたっているだろうが一匹も釣れない、二時間経つ間キャストイングするルアーを巧みに操るキャストイングするルアーを巧みに操る、を常に繰り返したにも関わらず釣れない、釣れないとゆうより魚がルアーに反応しつつかような事もない。巧みにルアーを操っている筈なのに魚のアクションが無いとゆう事はそれは魚がいらないんじゃないかと、そうか魚がないのかははは、全く俺は無駄な事をしたものだ、と思いタバコに火をつけ座って湖面を見ていた。

トンボが沢山飛んでいる、もう秋だなあ、トンボみたく俺の背中にも羽が生えんかなあ生えたら気持ち悪いけど飛べるから生えんかなあなどと思っていた。

一匹のトンボがゆっくりゆっくり湖面すれすれを飛んでいた、あートンボいいなあいいよ、秋の夕暮れとトンボなんて風流でいいじゃないなんて思っていたのも束の間湖面から魚がジャンプしトンボを食べた。

『うお』思わず声に出してしまった。見た限り50センチはあるであろう魚が飛ぶのを初めてみた。とゆうか魚がジャンプするなんて知らなかったので魚スゲーと思ったがトンボを食べやがってふざけないな、とゆう気持ちとトンボを食べる癖に何故俺の針には食い付かないんじゃふざけんなどゆう二つの怒りがこみあげてきた。なんだか魚になめられている気がした。『トンボの甲い合戦じゃ、お前絶対に釣ってやるからな待ってる』思わず口に出していた、またキャスティングしてルアーを巧みに操るを繰り返したがやはり全く釣れなかった、あたりはもう真っ暗になっていたので明日こそ釣ってやるからなと心に誓い家に帰った。

次の日は朝早くから釣りに出掛けた、その日は夜までやったが小さい20センチくらいの魚が2匹釣れただけだった。

次の日も次の日もその次の日も釣りに行った。だんだんと釣れる数は増えていったがああ50センチのトンボを食べた魚は釣れなかった。

次の日は午前中携帯電話を機種変更しに行った、やはり携帯電話がないとこのご時世やっていけないのだ。

そして午後釣りに行こう、今度こそあの魚を釣ってやろうと思いな

がらも腹が減っては戦は出来ぬって事でラーメンを作って食べてから行こうと思いいラーメンに湯を注ぐ、三分待つ、一分、一分半、二分、『プルルルプルルル』機種変更して初の着信があった。相手はたこ焼きパーティーの事でもめた一人のヨウスケ、あの時の事は常々悪いと思っていたのでこのタイミングで謝ろうと思いい電話に出た。『もしもし、この前悪かった、ゴメンな』『ああそんなもついいよ、つかそれより今から家に来いよ、凄いのよほんとマジヤベーヨ、マジヤバイからシユン早く来て』『えっ何がヤバイんだよ』『いやとにかく早くもうヤバイから、リナとタケシも来てっから早くね、ヤバイ、マジヤバイじゃーね』

ヤバイらしい、俺があんだだけの事をやったのに更に上をいくヤバイ事、なんだろう、想像もつかない、ひとまず今日は釣りを諦めるか、リナとタケシにも謝らなきゃならんし、何よりヤバイらしいからなヨウスケの家に向かった。

ヨウスケの家に着くと三人は酷く興奮してる様子だった、『ようリナにタケシ、ゴメンなこの前は』『おそーい、ヤバイんだからほんと』『おせえよシユン、マジヤバイから、スゲーヤベーヨ』どうやら二人とも全くこの前の事は気にしてないようだ、よかった、が、気になるのはこの前の事が全く気にならないほどのヤバイ事『何がヤバイのよ?』『これこれ』『ちよつと見てよアレ』タケシが指を指す方向にはヨウスケがいて魚を捌いていた。

『うおおああん』

見た瞬間変な叫び声がでた、其処にあったのは、どっからどうみても

もあの湖でトンボを食べた魚にそっくりな魚だった。

『ねえヤバイでしょ？今日午前中タケシとヨウスケが釣りに行って釣ったの』

まさかありえん。

あんなでかい魚を見てヤバイしか感想が出てこない奴に釣られるなんてありえん。

『湖ってあの家の近くのあつこの？』

『そうだよ、ヨウスケがさ釣ったんだわ、俺は30センチくらいしか釣れなかったけどね』タケシが言った。

ヨウスケを見るとなんだか照れくさそうな自慢気な顔をしている。

俺はなんだかもうどうしようもなくなった、悲しいような切ないようなもどかしいようななんて表現したらいいのかわからないくらいの感情、とにかくマイナスな、井戸に落ちて更にも上から土をかけられて生き埋めになったような気がした。

魚を見ると魚はこっちを向いて笑っている様に見えた、お前には釣られたくなかったんだとでも言っている様に見えた。だからってよりによってこいつらに釣られるのかよと思った。

ヨウスケは魚を捌いてから塩を振り網に載せた、網に乗せられてか

らも魚は俺の方を見ているような気がした、俺に釣られなかった魚は今日の前で塩焼になっていつている、魚は相変わらず笑っている様に見えた。

周りではリナとタケシとヨウスケが相変わらずヤバイよヤベーヨとか言っている。

魚は塩焼になった、俺はもうなんだかどうでもよくなってヤベーヨヤベーヨつって魚を食べた、ヤベーうまかった、塩がヤベーしょっぱかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0055b/>

魚たーぷるーぷ

2010年12月9日00時57分発行